

雨の柳川、ほこりの秋月、パトカーの高森、殺人の矢部

とんだ夏のとんだバイクの旅

松田 寿生

夢の中で雨が降っていた。

「寿生君、雨が降るとるよ」

妻の声が遠くで聞こえた。

「やっぱ、そげんか、アー嫌やね、カツパば着て走るっち」

寿生は起きて、テレビのスイッチを入れた。天気予報の番組まではまだ時間があつた。

「だったら、明日に延ばしたらよかがねッ」

「だめだよ、明日は晴れるちや限らんし、せっかくの夏休みだから。やっぱり行ってくっで」

寿生は、タオルを肩にかけると、歯ブラシを口に含んだまま、ガラス越しに、外景を覗いた。やっぱり雨が降っている。どうもすぐには上がりそうではなかった。観念したように、激しく歯ブラシを動かすと、事務的に口をすすいで顔を洗った。玄関のドアに突っ込んであつた新聞を抜き取ると、タオルで顔を拭きながら、脇に突っ込んでテーブルに着いた。モカの香りが漂っていた。

「おにぎりは何個にすんね」

「でくっだけ多い方がよか、一日に二つで、中に梅干を入れとつたらしばらくはもつごたっけん、アルミ箔で包んで新聞紙にくるんどけばビニール袋はいらんけん」

寿生はそう答えながら新聞の天気図を見ていた。鹿児島は晴れて来そうだから、明日ぐらいは大丈夫かな、と考えていた。

今回はまだ行ったことがない柳川に言ってみようと思っていた。どこに宿泊するか、それは夕方になってみないと分からないのが彼のいつもの旅のしかただつた。



XL250R は国道三号線を北に向かつて走つた。泥水を巻き上げゴーッと音を立てて走っている長距離トラックを次々ぬいて走つた。カツパのズボンの裾が風でまくり上がり、ブーツの中に雨水が入ってくる。走りながらステップに立ち、時々ズボンの裾をおろしてしては、雨水と路面から吹き上げる生

ぬるい泥水の中を走った。さすがにオートバイの姿は少ない。ところどころで休んでいるオートバイ野郎たちがピースサインをおくる。お前も好きだなあー、まあ頑張れや、と言っているみたいだ。

午前十時前、パチンコ屋の軒先にオートバイを止めて休憩をとった。タオルで顔を拭くと泥水が付いていたのには驚いた。早くデパートでも見つけて、カツパを脱いで顔を洗いたいと思った。雨さえ降っていなければ素敵な旅になっていたのに、思ってみても仕方がないことと思いながら、再びエンジンをスタートさせた。晴れの日に比べてエンジンの音も気が晴れないように思えた。

しばらく走ると柳川に着いた。街への入口は細く、街に入ると急に広い道に出た。周りを見渡しデパートを探して走った。懐かしい寿屋がここにもあった。まだ開店前でデパートの入口で子どもたちが開店を待って遊んでいた。雨は急に大降りになった。カツパを脱いで、荷物を降ろしている姿を子どもたちが異星人でも見るかのように物珍しげにしていた。寿生は、ヘルメットを脱いでデパートの軒先に入り地図を広げた。「水郷のまち柳川」と書いてある。もう水はコリゴリと思いながら一応街の有名な観光地を調べた。カツパを来てオートバイで行く気がしなかったのも、傘を買って歩いてみようと思った。その前に腹ごしらえをしなくてはならない。デパートの開店を待って中に入った。まずはトイレを探した。デパートのトイレは駅や公衆便所と比べると天国である。用を済ませると気分も一転して快くなった。

デパートの一角の窓の近くにある小さな喫茶店が、ブルマンのかぐわしい旋律を奏でていた。寿生はコーヒーを注文した。少し疲れを感じていたが、白いコーヒーカップに注がれたモカがなぜか懐かしく元気感がただよっているように思えた。

「すみません。ここでおにぎりを食べてもいいですか」

寿生は、新聞紙に包まれたおにぎりのコメと海苔の香りを気にしながら、ショートカットで黄色いブラウスのウェイトレスに聞いた。

「いいですよ。でも・・・」

「えっ、何ですか。やっぱり、だめですか」

「あっ、いいんです。でも・・・おいしそうですね・・・」

ウェイトレスは、カウンターに戻ってお茶を持ってきた。

「おにぎりには、やっぱりお茶ですよ。コーヒーは違うと思うんですが」

“そうか、「ちょっと」といったのは、そういうことなんだ”と寿生は納得した。それにしても、感じのよいウェイトレスだった。

柳川の水郷を流れる船は、雨具を着た観光客をのせてゆっくり流れていた。緑色の水面と、川際に咲くひまわり、時折り薄雲から顔を出す日差しが水郷に反射して、季節の変わり目を映しているように思えた。

雨がやんでいた。それは、次の目的地へ旅立つように寿生に告げた。



寿生はオートバイに荷物を積んだ。カツパを着た。風で乾かすためだ。濡れたタオルをサイドミラーに結び付けスタータをオンにした。エンジンは快適に「ドン・ドン」とドラムのように単気筒のリズムを響かせた。気分はもう最高になってきた。行くぞ。寿生とオートバイは一体となった。

秋月というまちがある。久留米からルート322を一時間ほど山間部に入った場所である。筑前の小京都と呼ばれており、桜とツツジの名所で葛湯も美味しい。あまり知られていないが「腹切岩」という場所がある。当時の重臣が秀吉と戦う無謀を戒めるが、聞き入れられなくて岩の上で妻子を刺殺し、割腹して果てた場所である。となりの小石原は焼き物、陶器があり「飛びかな」と「はけ目」は圧巻の伝統芸術である。しかし、途中トラックの往来が激しく、ゴー音を立てて行き交う。トラックは荷台からはこりを撒き散らし、道路の土を巻き上げながら走っている。そうだ、「ほこりの秋月」と寿生は思った。

寿生は、遅くに民宿に着いた。もう夕食はなかった。寿生はしばらく歩いて焼き鳥屋に入った。

「今日、飛行機が山に落ちたらしい」と、焼き鳥屋のかみさんが言っていた。奥にあるすすけた小型のテレビが飛行機事故を報道していた。飛行機の尾翼がなくなって、操縦不能になって墜落したとアナウンサーが言っていた。

「人の命は分からんね」

かみさんは、焼き鳥を返しながらか言った。

「おたくは、学生さん？」

と、焼酎をお酌してくれた。

「いえ、夏休みなんで、バイクで旅をしているんです」

「元気があっていいわね。どこから着たの」

「熊本の南の方からです」

「ああ、そうなの。わたしは生まれは青森なの」

寿生は驚いた。なぜこんなところで焼き鳥屋をしているのか、全く腑に落ちなかったからである。

「えっ、そうなんですか」

「そうよ、不思議でしょう」

「あっ、はい」

「実はわたしは・・・」

と、言ったけど後の言葉が聞き取れなかった。

寿生は、旅の疲れか急に眠くなった。勘定を済ませて民宿に帰った。

「わたしは生まれは青森なの」と言った女将さんのセリフを耳に残しながら眠った。

朝の空気は山々のすがすがしさが、まちに流れて来ているようで心地よかった。

昨夜の女将さんの最後の言葉が気になりながら次の目的地をめざした。

「わたしは、青森生まれなの」と言った女将さん。

なぜ、ここで生活しているのだろうか。

寿生は、オートバイのアクセルを更かしながら、あの焼き鳥屋の前を歩いていこうとハンドルを切った。

焼き鳥屋の前を通ったが女将さんの姿はなかった。寿生は焼き鳥屋の前を2、3度往復した。

「まあ、いいか。それぞれ人生には都合があるのだから」

寿生は、気持ちを入れ替えて、本通りに出た。

朝方の雨のせいか、山々に雲がかかり、出て来たばかりの太陽が雲を茜色に染めていた。

寿生はふと思った。

「あの女将さんも雨上がりの茜色みたいな人だったんだ」

と思ったら、登ってきた太陽みたいに気分が切り替えられた。

寿生は秋月城跡の黒門に別れを告げた。



すっかり晴れ上がった日差しを浴びながら、カーブを縫うようにオートバイは走り続けた。気分はまさに爽快そのものだった。昨日の悪天候は、今日の晴天で許してやろうと思った。オートバイと風との一体感に身体をまかせた。まるで緑の草原と一緒に愛の歌をうたっているようだった。

高村光太郎の「人に」という詩がある。

「いやなんです
あなたのいつてしまふのが——
花よりさきに実のなるやうな
種子（たね）よりさきに芽の出るやうな
夏から春のすぐ来るやうな
そんな理窟に合はない不自然を
どうかしないでみて下さい
型のやうな旦那さまと
まるい字をかくそのあなたと
かう考へてさへなぜか私は泣かれます
小鳥のやうに臆病で
大風のやうにわがままな
あなたがお嫁にゆくなんて」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

愛しい女性に婚約者がいることを知って、年上の男性と結婚することに自分の無力感を悲しむ詩である。

“ 本当なら自分がその女性を幸せにしてあげたいと、まだ大人になる前の少年が夢見た夢が、無慈悲に現実という時間に奪われてしまったことで、少年は悲しみ成長するのである ”と、寿生は中学生の時にこの作品にふれてイメージしていた。

昨日の茜色の女将さんはそんな感じを少年たちに与えていたのではないかと思いつつ、南阿蘇の高森のまちに着いた。高森は蕎麦が美味しいとガイドに書いてあった。

腹が減った。妻から作ってもらったおにぎりはもうなかった。どこかで腹ごしらえをしなくてはならない。寿生は蕎麦が好きだ。父親譲りだと思っている。

紅い桃太郎旗に白抜きで「そばあります」と書いてあった。普通は「そば・うどん」と単語で書いてあるのに、なぜ「そばあります」と、述語で書いてあ



るのだろうと思いながら蕎麦を注文した。蕨の具がはいった蕎麦は美味かった。髪を巻き上げて頭に固定して料理をしている女性は、四十路ぐらいか。奥の方で若い男性が麺を練っていた。

寿生は、さきほどの疑問を聞いてみたくなった。

「すみません。どうして、そば・うどんではなくて、そばありますと書いてあるんですか」

「ほら、やっぱりね」

女性は、奥にいる男性に合図を送った。

「普通は、うどんとか、そばとか書いてありますよね。そばありますっていうのは、うどん専門の店とかに書いてあるのは分かりますが、そば屋なのに何でそばありますと書いてあるんですか」

女性はニンマリしながら、湯呑にお茶を注いでくれた。

そして寿生の顔を見ながら

「あんたが寄るようによ」

「えっ」

寿生は意味が分からなかった。

「どうして」

早く答えを聞きたい衝動に駆られた。

この雰囲気を引き裂くようにパトカーのサイレンが鳴った。一瞬心が騒いだ。

「また事故だね。先のカーブでよく起こるんだよ。あんたもうちに寄ってよかったね」

女性が言ったことが妙に納得できた。

それでも、まださっきの回答は腑に落ちなかった。女性は続けた。

「ただ、ひかえめなだけ・・・」

「普通、商売している場合は積極的に宣伝して客を伸ばすんじゃないですか」

女性はまたもニンマリした。

「商売気がないんだよ。あんまりお客が増えるといそがしくなるからね」

「いそがしい方が儲かるんじゃないんですか」

女性はまたお茶を注いでくれた。

「客が増えるといそがしくなる。そしたら、お客さんへのサービスが落ちる。そしたら、店の味わいが伝わらなくなり、お客は減ってしまう。と、わたしは思っているの」

なるほど、そういうこともあると思った。



「あの文句、そばありますという文句は結構人気があるんで、また寄るよと書いてくれるんですよ」

確かに、店の前にはバイクが多かった。寿生は納得させられた気分で、お茶を飲み干すと勘定を置いて店を出た。「そばあります・・・か」と、つい独り言を言いながらセルを回した。そして、また通りかかったら寄ってみようとブルン・ブルンとアクセルをふかし一気にスタートした。

事故現場の警察官の誘導に従いながら、高森の町通りを抜けて、再び時間の流れに乗って走った。高く澄んだ青空に飛行機雲が白い一直線を描いていた。

久しぶりに矢部に来た。ここはお茶と通潤橋で有名である。矢部茶は渋みの中にお茶の旨みがあって、美味かったという記憶がある。

以前選挙の応援でピラ配りに来たことがあった。その時は通潤橋の近くの喫茶店でコーヒーとサンドイッチをご馳走になったものだ。今日も懐かしく思い寄ってみようと思った。通潤橋に続く一本道は交通規制になっていた。寿生は近くにオートバイを止め、歩いて思い出の喫茶店に向かった。喫茶店は閉まっていた。ドアに「本日臨時休業」と書いてあった。周辺は人が多かった。

「何かあったんですか」

喫茶店の近くで通潤橋の方を見ていた男性が、振り返って話した。

「通潤橋の下に死体があったんだ。若い女だということだ」

確かに、警察や刑事らしき人物が周辺に多かった。

「いつですか」

「今朝、この喫茶店のマスターが花を摘みに行ってみつけたらしい」

ああ、そうか、だから臨時休業なんだ。

寿生の旅の目的の一つに通潤橋の写真を撮ることがあったので、カメラを手に通潤橋に近づいて行った。警察官が振り返って寿生を見た。

「写真を撮ってもいいですか」

寿生はカメラを見せて警察官に聞いた。

「ああ、どうぞ。こんな具合で残念だけど、せっかくみえたん(観光)だから撮っていきなさい」

寿生は無視されるかなと思っていたが、返ってきた言葉に意外性を感じながら少し離れたところから撮影した。観光地でこんな事件が起こるとイメージダウンになることから、地元の警察も考えて対応しているんだなと思った。

後日の新聞には、「通潤橋殺人事件」とサスペンス小説みたいな見出しがあっ



た。

五日間の夏休みも終わった。また、明日からいそがしい仕事が出ている。家に帰った寿生は、お風呂から上がり冷たいビールで夏休みの旅に終止符を打った。オートバイは今度の休みに洗車することにして。



寿生35才、バイクとカメラに夢中であるころのツーリングの記念詩である。